

学習院大学教授 佐々木毅

今年の政治の大きな話題は総選挙と政権交代でありましたが、同時にこの政治全体の動向を見る上で大事な役割を果たしたのが政党のあり方、政党の姿であったと思います。今日「政党のガバナンス」という表題を掲げさせていただきましたが、これは政党が多くの政治家を一体としてまとめながら活動し、与党として、あるいは野党として、国会の内外で活動していくことがどの程度できるかという、そういう能力に関わる問題を考えてみたいと思ったからであります。

今年は民主党から離党者が色んな形で出まして、そしてずいぶん最後は民主党の衆議院議員の数も減少するというようなことが起こりました。

またそこから新しい政党が次々と誕生しまして、総選挙では、ずいぶんたくさんさんの政党が選挙に参加しました。

こういう非常にめまぐるしい形での政党の変貌、あるいは議員達の行動というものが目立った年であったというのが私の実感でございます。

そういう中で政党という組織は果たして大丈夫だろうか、あるいは、どういう姿でなければならないのかというような問題を我々は有権者として突きつけられたのではないかと思っております。言うまでもないことでございますけれども、議会制というものは政党というものを前提にして成り立っております、多くの議員達がグループとして政治を行うというルールが、その大原則でございます。

従って、その議会制の姿、実際の形というのは、そこで主役となります政党というものがどれだけの力を持っているか、あるいは、どれだけの内部をまとめ、更には他の政党と交渉する力を持っているかということによって決まってくるというところがあるわけでございます。